

## 論文要旨

題目 「高齢者のインターネット利用と社会関係—ICT 第一世代に着目して—」

氏名 森 やす子

1980年代以降、情報環境は劇的な変化を遂げた。新しい情報端末やアプリケーションが開発され、情報環境は変化を続けているが、高齢者のインターネット利用率が他の年代に比べて低いという状況に変化はない。現在、高齢期を迎えている1950年以前生まれは、1980年以降の情報化の進展を担った層であるにもかかわらず、インターネットの利用については、利用／非利用の差、利用内容に差が見られる。本論文は、成人になってから情報化の急速な進展に遭遇した1950年以前出生コーホートに焦点をあて、利用までの経過、高齢期でのコミュニケーションにおけるメール利用、高齢期のネットワーク維持に対するICT（情報通信技術）の貢献の可能性を明らかにすることを目的とする。社会や日常生活に大きな影響を与えたICTに成人になってから出会うことがインターネット利用にどう影響したか、個人の生活経験やネットワークという視点から明らかにする。さらに、高齢期の社会関係の変化が高齢者の地域社会での生活にも影響を及ぼすと考えられることから、ICTと地域のネットワークの連携により、地域コミュニティの中で高齢者のパーソナル・ネットワーク維持の可能性を社会実験によって実証する。

具体的には、以下のようなリサーチ・クエスチョンを設定した。

- ① 1950年以前出生コーホートのインターネット利用についてどのような要因が影響しているのかを明らかにする。
- ② 新しい技術の採用を個人要因と環境要因の相互作用に規定されると想定する場合、個人の属するどのようなネットワーク・セクターが影響を及ぼすのかを検討する。
- ③ インターネット利用開始に関わる要因は、高齢期の電子メールを利用したコミュニケーションに影響を与えているのか、また、親しい人とのメールでのコミュニケーションが人間関係への満足度を高めることに影響するのかを検討する。
- ④ 高齢者がICTを活用して、友人・知人のネットワークを維持し、さらに、新たな地域のネットワークを作り出すためには、どのような環境条件を整える必要があるかを社会実験により検討する。

研究方法は、2003年と2009年に実施した1950年以前生まれの男女18名への半構造化インタビュー、2009年に実施した65歳以上（1918～1944年生まれ）の男女835名へのWEB調査である。また、リサーチ・クエスチョン④については、独自に開発された高齢者コミュニケーション支援サービスを用い、ICTを活用した地域での高齢者のコミュニケーション促進について、2010年から都内で社会実験を行った。

調査の結果、リサーチ・クエスチョン①・②・③について、以下の知見が得られた。

- ① ICT第一世代（1950年代以前生まれ）のインターネットの利用／非利用や、利用に至る過程、利用内容などに、OA化とIT化のおよぼす時代効果、ライフイベント効果としての職業キャリア、そして、加齢という年齢効果が影響していることが明らかになった。職業経験の有無、職場でのIT化が退職の前か後かというタイミングに注目する必要がある。性差は、女性のライフコースや、職務内容の男女差に起因すると思われる。

- ② インターネット利用とネットワークの関係では、所属団体や遠方の友人との連絡で、多くのメンバーがメールでのコミュニケーションが多くなっている場合は、そのネットワーク・セクターでの連絡にはメールを利用することになったと考えられる。交友関係が近隣の関係に限られており、皆がメールを利用しない場合はメールの利用に至らない。
- ③ 家族・親族以外へのメール送信に影響する要因は、男性では定年後のネットワークという要因、女性ではパソコンの利用能力という経験の要因、と異なっている。

人間関係への満足度を高める友人関係は、インターネットを利用する男性高齢者では、楽しみを共有するつきあいで、サポートの授受が主となるつきあいや形式的なつきあいではなかった。インターネットを利用する女性高齢者では、友人関係の在り方が人間関係への満足度に及ぼす影響は大きくなかった。

社会実験から、リサーチ・クエスチョン④について、以下の知見が得られた。

- ④ ICT利用が、地域社会でのつながりの維持や構築に寄与するという示唆が得られた。これは、地域の資源を含めたネットワークをICTネットワーク上でつなぎ、それを機能させる仕組みを構築することによって実現した。その仕組みの中で重要な役割を担ったのがサポーターという地域の中高年である。サポーターの資質は、この運用モデルでの展開を進める上で重要なポイントとなった。

高齢期となったICT第一世代に着目した本研究の学術的示唆としては、次の四点があげられる。第一に、技術の普及を個人の視点で見た場合、個人要因と環境要因との相互作用モデルに生涯発達の視点を取り入れることの有効性を示した。第二に、インターネットを利用する高齢者が、家族・親族以外の親しい人へ電子メールを送信することに影響する要因の男女による違いを明らかにした。第三に、高齢者のインターネット利用のコミュニケーションと社会関係については、インターネット利用による影響と高齢期という世代による影響から説明した。第四に、高齢者のICT活用ネットワーク構築を、同時並行型、ICT先行型、ネットワーク先行型という三つの過程で示した。実践的示唆として、次の二点があげられる。第一に、高齢者のICTを介したネットワークは、従来のネットワークを維持しつつ、あらたな社会資源を加えながら地域のネットワークを構築していくことで、孤立を防止するネットワークになることを示した。第二に、サポーターが支援するという運用モデルでは、サポーターの資質が重要なポイントとなることを示した。

本研究の限界として、調査対象が一般的な中高年とは言えず、質的・量的調査共にインターネット利用者に偏った調査となり、非利用の要因や非利用者の特性については十分な言及ができていない点がある。今後の課題として、ICTサービスとしてだれでも入手可能なシステムの利用と多くの地域住民の参加を得ることの必要性、そして、システム開発側が利用者の暮らしや心情に視線を向けることの必要性があげられる。